

3 新しい緑化技術「グラウンドカバープランツの動力吹付け緑化法」

ねらいと成果

近年、グラウンドカバープランツによる緑化が注目を集め、法面緑化にも積極的に利用されるようになってきた。しかし、これまでの方法はポット苗生産であるため植付けは、手植えで行わざるを得ない。また、苗の生産に長期を要し、輸送、植付けの手間がかかり、ポットの処理等の煩雑さがあり、さらに法面植栽では傾斜のため作業上危険がある。

そこで、新たに開発した吹付け機械により、グラウンドカバープランツのセル成型苗、細断苗と肥料、土壌等を混合後法面に吹付け植栽することを可能にした。これにより、従来の西洋芝に代わり景観上も好ましい多彩な植生が実現でき省力、経済的で大規模緑化に対応できる。

「バイオ・セル・ショット工法」として株式会社大本組、吉田建設株式会社と共同特許出願中である。

内容

植栽に使用する苗はセル成型苗またトレイで養成したマット苗である。これらの苗は1～1.5か月で生産でき、発根済みのため吹付け後の生育が良好である。セル成型苗または細断したマット苗、肥料、

土壌、植生基盤材、法面に効果的に付着させるための接合材等をタンク内に投入し圧縮空気を送り込み混合する。空気を介しての混合のため、従来のように植物を痛めることがない。その後、混合されたものを空気噴射によって、ノズルの先から施工面に吹付け植栽する。本工法に最適な種類は、セダム類、マツバギク、イワダレソウなどがあり、生育が旺盛で被覆率が高く、見栄えのよい花が咲くので景観上も適している。

セル成型苗、マット苗（細断苗）はポット苗と異なり、短期間且つ大量に養成が可能であり、栄養繁殖性の草種は全て生産可能である。このことにより、従来法面等に植栽不可能であった種類も植付け可能となり、多種多様な植生が実現できる。

普及上の注意事項

植栽面の既存雑草を完全に除去する必要がある。また法勾配、土質により基盤造成が必要な場合がある。盛土、切土の別や乾燥の度合により、適合するグラウンドカバープランツの種類を選定する必要がある。活着を確実にするため2～3種類混植する方が良い。

福嶋 昭（北部農技・農業部）

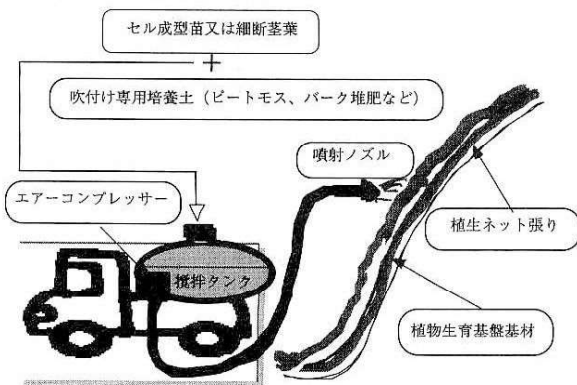


図1 バイオ・セル・ショット工法の概略
(共同開発：兵庫北部農技、株式会社大本組、吉田建設株式会社)

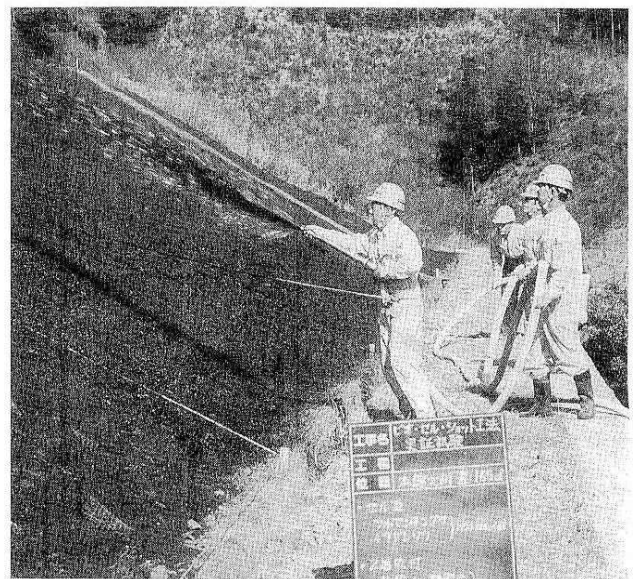


図2 法面への吹付け施工状況